集団構造とパースナリテイ*

京都大学心理学研究室

岡 野 正 男**

社会心理学は集団について多くの研究を行なってきたが、そこでは主として集団状況の成員の行動への影響が扱われ、成員のバースナリテイの集団状況への影響については、あまり研究されていないようである。集団成員の地位の決定交替についても、成員のバースナリテイを問題にするよりは、その相互の力学的関係からの問題追求が多かった。しかしことにインフォーマルな集団では、成員の地位や集団の行動の決定に、成員のバースナリテイが、大きな要因となるものと思われる。この問題は Whyte の研究でもとりあげられているが、彼の場合は観察からの記述に終始して、十分な結果をうるにはいたっていない。また学級集団内の成員結合の要因として、バースナリテイが、学年の進むとともに重要になることも見出されているが、これらは単に質問紙への応答について、論じることになっている。したがってこのような不備を補うため、インフォーマルな集団における集団構造と、成員のバースナリテイとの関係について、調査を行いたいと思う。

従来集団構造の研究には、ソシオメトリック・テストが多く用いられているが、この方法でえられた図式と、現実の集団構造との関係は、なお十分に理解されていない。したがってここでは、バースナリテイの影響がもつとも強いと思われる日常生活の中の集団構造を、直接の観察でとらえることとした。

調査対象 京都市中京区C小学校*** 5年口組****。
クラス構成は男子29人、女子21人であるが、ここでは男子についてのみ報告する。

調査期間 1954年9月1日から11月末まで。

調査方法 行動観察とロールシャッハ・テストのほか、質問紙を附加的に用いた。

行動観察は期間中は毎日、児童の登校から下校まで

の行動をともしで行なつた。観察状況や観察項目は、とくに定めていない。

ロールシャッハ・テストの実施とスコアの方法は、ほゞ Klopfer(3)によつた。質問紙は「好きな人」を指名させたが、これの実施は11月7日である。結果は Fig.2 に示す。

われわれはこのような直接の行動観察によつて、集団の動的な構造をとらえ、そこでの各人の位置と役割が、彼らのバースナリテイの特性に左右されていることを知りえたが、さらにロールシャッハ・テストの結果から、このようなバースナリテイの特性を裏づけることができた。もちろんここに報告した結果は、観察されたこの集団に固有のものであつて、たゞちに一般化することはできないが、このような生態観察の結果を集積することによつて、各集団の特殊性をこえて支配する一般的な法則をみいだすことは、期待してよいと考える。

なおここに報告するのは、観察とテストからえた結果のまとめであつて、具体的な観察例や、テスト結果のより詳細な吟味は、紙数の関係ですべて省略した。

I 集団の構造とその機能

1. グループ間の関係

遊び時間には、クラスの成員のほゞ全員が、ひとつのまとまりとなつて行動するのがふつうである。しかし継続的に観察を続けると、このようなまとまりの中にも、いくつかの小集団がみいだされる。このような小集団は教室内外の活動の中に、しばしば明瞭な形をとつてあらわれるが、このうち主なものとしては、次の3種があらわれる。

1. **グループA** これはクラスの主要なメンバーの大部分、K, Y, H, I, T, D, F の7人からなり、もつとも安定した構成をもっている。ふだんはこのグループを中心として、クラス全体のまとまりがつくられるのであるが、ときに他のメンバーを拒否して、排他的な集団となることがある。この場合もさきの7人は、このグループに入りうる基本的なメンバーであつて、グループへの加入は拒否されない。

* Group structure and personality of members

** Masao Okano (Department of Psychology, Kyoto University)

*** この小学校は京都市の中央部にあり、校下の家庭には商業が多く、貧富の差はあまり大きくない。

**** このクラスは3年に編成されたのち、4年に男子1人の転入があつた。

Table 1 主要メンバーのテスト結果

	R	W%	d	dd	S	体験型	M	ΣC	FC	CF	C	FM	F%	A%	FK	Fc	AH: dAH	P	O%	O+%	Z
K	64	20	9	6	1	C	2	3.0	1	1	1	13	67	61	1		32:14	10(6)	9	4	43.5
Y	68	31	6	1	8	M	5	3.5	5	1		3	68	41	2	1	17:19	7(7)	13	12	53.5
H	28	61				M	4						86	54			15:8	2(1)	29	25	74.0
I	35	74				M	6	3.0	4	1		6	43	43	2		18:3	5(4)	17	14	82.0
F	37	46	1			M	5	1.0	2			4	68	41	1		19:2	7(5)	11	11	53.5
T	15	60				M	1	0.5	1			3	67	60			8:3	5(4)			37.0
D	52	60	2		2	M	10	7.5	5	5		5	52	35	2	1	23:8	6(4)	17	13	103.0
J	68	47			3	M	9	7.0	14			10	44	54	2	1	44:2	6(5)	20	15	93.5
S	33	45		1		M	8	1.5	3			6	45	45			20:3	4(3)	13	13	52.5
W	82	29	6	6	1	M	8	2.0	4			16	55	60	6	1	49:11	9(5)	15	10	65.0
男子29人の平均	43	47				M16 非M13	3.7	3.0	3.5	1.0		6.8	61	57				5.7 (4.3)	15.4	9.8	55.6

・ AH:dAH は A+H と Ad+Hd の比

P 反応で () 外は実数, () 内は種類数

O 反応は W 及び D 反応のうち, 女子を含めた 49 人中に, ただ 1 回だけ出されたもの。O+ はそのうち良質と判

定されたもの。判定は 2 人のテスターが独立にあつた。 $O\% = \frac{O}{W+D}$, $O+\% = \frac{O+}{W+D}$

Z のスコアは Beck(1) によつた。

2. グループ B 男子全体の遊びの時も, これからぬけているメンバーがあるが, 彼らは h と u の結合を基本としたグループ B をつくりやすい。このグループに集まるのは, 一般に体力も弱く, 敏活でないメンバーが多い。このグループは決して排他的にはならず, ときには女子を加えることさえある*。ふつうこのグループは, グループ A のメンバーの関心をひかないが, まれに彼らの加わってくる場合は, 遊びの主導権は彼らに移り, グループ B は, グループ A とそれに従う男子全体の遊びの中に解消する。このようにグループ B は, グループ A の下位にあつて, その人数や構成もグループ A のうごきに左右されている。

3. グループ C グループ A が排他的となつたとき, これに対抗するグループがつくられることがある。しかしこの種のグループは, その構成に変化が大きく, グループ A が開放的になるとともに, 次第にそちらに移つて解消するのがふつうである。一般にグループ A 以外のメンバーの間には, 常に多様な組合わせの交渉がもたれてはいるが, その中から持続的に密接な関係を見出すことは少ない。

上にのべた 3 種のグループのうち, グループ A はクラスの中心にあつて, もつとも重要である。しかしこの 7

人のメンバーは, 行動的にはひとつのグループをつくつてはいるが, その内部には複雑な結合と排斥の関係を含み, 各人の果している役割もさまざまである。つぎにグループ A 内での各メンバーの位置と, その相互の関係についてべる。

2. グループ A の内部構造

3 人のリーダー 3 年にクラスが編成されて以来, H, Y, K の 3 人がクラスのリーダー格であつた。

3 年当時もつとも勢力のあつたのは H であるが, その行動は多分に我まゝで暴君적であつた。しかし 4 年の春に先生の注意をうけたのをキツカケとして, 彼の暴君時代は終り, しばらくは遊び仲間からもボイコットされていたが, その後ふたゝびクラスの中心のひとりに復活した。彼は学力ではクラス随一であり, またすぐれた体格と運動能力をもっている。

H の次にこれに代つて, もつとも派手な活動家となつたのは Y である。彼はクラスの活動のあらゆる場面で活躍し, 委員長の役割さえ勝手に引受けたりするし, また掃除や列行進の時は, 他のメンバーに命令したり叱りつけたりして, 監督者としてふるまっている。遊びの時も彼は中心のひとりであるが, ときには遊びのルールを無視した我まゝをすることもあつた。一般に彼の行動には, 他を支配しようとする傾向がめだち, また何かにつけて他のメンバーの行動を批判するウルサ型であるが, 彼の特徴はその攻撃的な強引さにある。彼への反抗はたゞち

* 遊びの場合, 男女ははつきり別のグループをつくるのがふつうであつて, ことにグループ A は決して女子と一緒にならない。

により以上の攻撃を招くので、他のメンバーはあつたらずさわらずの態度で、これに従うのがふつうである。このようにYは、その積極性でクラスの勢力家となつてゐるが、Kに対しては一目おいてゐる。

KはYとちがつて、クラスの表面で派手に活動するようなことはないが、H、I、Tなどの重要なメンバーに強い影響力をもち、グループAの中心的存在である。YはグループA内でも権威をふるつてゐるが、個人的に親密な関係はもたず、積極的に彼に従おうとする者はいない。Kの存在は、遊びの時にことに重要であつて、グループAの中心としてこれをリードするのは、主としてKである。このグループが排他的になつた時に、他のメンバーが「入れてくれ」と交渉するもの、ほとんどKに対してである。

Fig. 1 A グループの構造

中核の結合とK、Yの同盟 グループAの構成は、時により多少の変化をとまなつてゐるが、この変化を通じてグループ形成の核となるのは、K、I、Tの結合である。この結合は10月の上旬に確立したが、これはHとYの位置が、大きくかわつた時期でもあつた。

HはこれまでI、Fの2人とともに親しい関係を結び、そのリーダーであつた。いつぼうKは、以前からTと常に行動をとまにしており、このKとHの間にも、友好的な関係がたもたれていた。彼らはいずれもYを嫌つて、あまり交渉をもたなかつたようである。ところがこのような関係は、10月の上旬に急速に変化して、こんどはKとYが同盟して、Hを攻撃する形がとられてきた。これと同時に、IはHよりもKに近づいて、K、I、

Tの結合ができあがつた。この結合には、同盟者のYと排斥されながらもこれに従つてゐるHとが、もつとも頻繁に加わり、D、Fの2人はより周辺的な存在である。(Fig. 1, Fig. 2* 参照)

このようなK、Yの同盟は、最近威張つてきたというHに対抗することを目的としてゐたが、この場合、KはIが自分達の側に加わることを期待しており、Iの方でも以前とことなつて、Hからの誘いに応じるよりも、Kと一緒に行動することをえらんでいる。

こうして同盟したK、Yらによつて、Hはことごとく攻撃をうけたが、彼は常に孤立して、援助する味方をも

→ 「好きな人」

外部からの矢印は主要メンバー外からの撰択

Fig. 2 主要メンバーの位置 (質問紙による)

つてゐない。この後K、Yの同盟はあまりおもてだたなくなつたが、Hに対する否定の態度は続き、Yが機会あるごとにHを攻撃する一方、Kはもつぱら彼を無視する態度にでている。これに対してHは、常にKの動向に注意をはらつて、それに従おうとしているが、Kはこれには全く冷淡で、IやTと一緒に行動しているのである。

ところでHは、Kに対していつも気をつかつてゐるものであるが、彼が親密な感じをもつてゐる相手は、現在で

* Fig. 2 質問紙の結果は、グループAの重要メンバーが中心を占めることを示してはゐるが、それらのメンバーの関係を十分には示していない。

もIであつて、気やすく肩をくみかけたりするのは、まずIをえらびIが既にKと一緒にいる時などは、Fをえらぶのである。彼はKに対して肩をくみかけたりすることは決してない。このようなHからの働きかけに対しては、Iの方でも一応受入れており、FもまたHに好意はもっていないが、露骨な態度をとることはしていない。

DとFの位置 Dは後期のクラス委員長であるが、彼の活動は主として勉強面に限られ、遊びの場面などでは主導的な役割をもたず、グループA内でも周辺の存在であつて、K、Y、Hなどの争いには、積極的に立ち入ろうとしない。

Dのもつとも親密なのはIであつて、彼らは入学以来の親友として互いに認めあっている。しかしDは、KやYに対しては、距離をおいた関係を保ち、Kに対しては一種のつきあいにくさを感じているようであるし、Kの方もまた、Dを自分達の行動とは区別して、あまり問題にしていない。いつぼうYは、Dに親しみをもち彼を尊敬しているが、時に彼を無視したり横車をおしたりすることは、他のメンバーに対する場合と同様である。このYに対して、Dは好感はもっておらず、常にあたらずさわらずの態度をとつて、彼にとりあわないように気をつけている。

DはIを親友として感じているが、その行動上では、彼の最大関心事である勉強でもつともすぐれているHに常に注意をはらい、主要な交渉は、主としてHに行なっている。これに対して、Hは常にKに配慮して、Dにはむしろそつてなく扱うことが多い。

Fの対人関係では、Iに対する親しみが、彼からの働きかけとしてほとんど唯一のものであつて、グループA内では、もつともめだたない周辺の存在である。彼はYを非常に嫌っているし、Kにも接近するようなことはなく、KやYの方でも、Fの存在はあまり問題にしていない。

IとTの役割 IはK、Tとともに、グループAの中核の結合をつくつているが、彼はどのような場合にも、積極的に他をリードするような行動をとらない。しかし彼はグループがどんな構成をとる時にも、必らずこれに加えられ、その地位は安定している。すでにのべたように、D、Hなどはそのもつとも親しい感情をIにもつており、またKもIとの結合以来、彼をもつとも大切な友人として扱っているのである。このようにIは、グループAの心理的な結合点であつて、グループ形成の粘着剤のような役割を果たしている。これはリーダーのKが、心理的に他のメンバーと気のおける関係にあるこのグループでは、きわめて重要な役割と思われる。

Tはずつと以前からKの下にあつて、その行動に追隨している。Tのこのような関係は、HやYに対しても同様で、Tの行動は、常にその場のリーダーの下にあつてリーダーの代弁者の役割を引き受けている。一般にTの行動は、その大袈裟な愛嬌のある表情と性格で、その場に気やすい雰囲気をもたらす、グループの活動を円滑にする役割を果たしている。

K、Yの同盟のなりゆき 10月半ば以後、K、Yの同盟はあまりおもてだたなくなつたが、10月下旬以後Hに対しては、協力と否定の態度が、交錯してあらわれている。これらの場合のうち、グループAの外部に對立の相手があらわれたときには、Yはグループの先頭になつて行動すると同時に、Hを自分達のグループの重要な一員としてうけいれ、Hの方も、すんでYの参謀格となつて活躍している。しかし問題がグループAの内部にあるときは、Hは相変らず排斥を受け、孤立させられている。このような態度の使いわけは、ことにYに明らかであつて、Kの方は、H無視の基本的な態度をそれほどかえていない。

ところでK、Yの両者は、その接近によつて、互いの不満をも増大させていたらしく、Yは11月上旬に、Kは11月下旬に、それぞれ互いに初めての攻撃を行ないあつてゐる。のちに12月に入つてから、この両者ははつきり別れて行動を始めたというが、もともとこのK、Yの同盟は、H排斥を目的とした便宜的な結合にすぎず、その同盟の当初ですら、お互いに不信の言葉をもらしていたのである。

3. グループA外の主要メンバー

これまでにのべたグループAの7人のほかに、クラス内での重要なメンバーとして、J、S、Wの3人をあげておかねばならない。

Jは前期のクラス委員長、Sは同委員で、ともにのおの班*での活動の中心であり、またクラス会などの重要な発言者である。

Jの立場はDに似て、遊びの場面などでは重要な役割をもたないが、その対人関係では、安定した位置をもたず、グループAのメンバーとも個人的に交渉が多い反面、クラス内の嫌われ者であるaやeとも、一緒に行動したりする。しかしJは、グループAのうごきには気を配つて、その集まりにもよく加わつてくるが、Sはこのグループから一層離れて行動している。

Sの交渉範囲は、比較的せまく、その相手の多くはグ

* クラスの内部は、それぞれ8、9人の6班に分けられ、授業その他の単位となつてゐる。

グループBのメンバーであるが、Sは彼らとの関係では、一種の兄貴株の存在として、主導的に行動する側である。

WもグループA外にあつて、とくに密接な対人関係をもたないが、その行動はクラス活動の妨害者として注意すべき存在である。その班での行動は、中心的存在であるJとしばしば問題をおこしており、またクラス会での発言も比較的多く、一学期にYがクラス会で盛にねばつたときも、その対立者として議論し続けるのはW位であつたという。いままYは、Wに一応の注意をはらつているという。

以上で10人の主要メンバーを紹介してきた。主要メンバーの選択は、調査終了後、担任の先生と私とが、まず9人を選んだ。両者の選択は、F、Wを除く8人で一致したが、先生はクラスの表面の活動の少ないことでFをとらず、私はグループ構成を中心にみたためWをとらなかった。もちろん10人ずつ選んだ場合は、両者は完全に一致するので、これまであげた10人を主要メンバーとして扱った。

Ⅱ ロールシャッハ・テストによるパースナリティーの判定

1. 主要メンバーの反応様式

ロールシャッハ・テストの結果の検討にあつて、まず10人の主要メンバーの反応様式の特徴をみる。第1表から下線を附した項目について、主要メンバーとそれ以外の、平均より高い者と低い者の分布を求め（体験型のみはM型と非M型にわけ）、その分布差のチャンス・プロバビリティーを、Fisherの直接確率計算法で算出すると、 $P < .01$ の差のみられる項目として、体験型、M反応、O+の3項目がえられる。すなわち主要メンバーには、M型が多く、平均より高いM反応とO+を示す者が多い。さらに男子の全員中で、この3条件を全部満たす8人は、すべて主要メンバーであつて、K、Tを除く主要メンバーが、他のメンバーとことなつた共通の反応傾向をもつことが知られる。この反応傾向は、自発的思考と行動をともなつた、比較的高い知能を示すものと考えてよいであろう。これはこの8人が、Wを除いていずれもクラスの成績の上位を占めていることと、対応している。

2. グループA外の主要メンバー

つぎに主要メンバーのうち、グループAに属する者と属さない者の相違をみる。さきに主要メンバーの共通傾向として、M反応が平均より高いことをあげたが、これをさらに、 $M \geq 8$ 、 $M < 8$ に2分すると、グループA

外の3人は、いずれも $M \geq 8$ に属する。グループA内でこれにあたるのはDのみであるが、彼はグループA内では周辺的な存在であつて、こゝでこのDを含めて $M \geq 8$ の4人を、分離して考察することは許されるであろう。

いま $M \geq 8$ の4人を、グループAへの関心の強さで分けると、D、Jの2人が強く、S、Wは比較的関心が弱い。彼らのこの傾向の相違に対応するシンボルとしては、色彩反応がとりあげられる。すなわちD、Jの2人が、いずれも非常に高いΣCの値を示すのに対し、S、Wは平均以下の低い値にとどまつている。

JとDとはその反応様式が非常に似ているが、両者の最大の相違は、その色彩反応のうちわけにある。すなわちDがFC・CFをおのおの5ずつ出すのに対し、JはことごとくFCに終始している。いまこの両者の行動上の相違をみると、つぎようになる。

Dの行動には気まぐさや身勝手さも多く、対人関係でも自分の感情を明瞭に示して、興味ある相手以外にとりあわないし、ときにはまた猛烈な喧嘩をすることもあつた。しかしこのような彼の行動は、その明るいこころのなさによつて、緩和されているらしい。これに対してJは、決して自分の感情のまゝに行動するようなことはなく、争つても自分から妥協してしまうのが常であり、正面から怒りを爆発させることはない。この両者の相違は、さきにあげた色彩反応のうちわけに反映されていると考えることができるが、この行動傾向の差は、グループAに対する関係でも同様であつて、DはときにKなどから無視されても、相手の意向にかまわず入りこんでしまつたが、JはグループAからしりぞけられた場合、たゞちに身をひいてしまうのである。現在この両者の位置の差を考えると、争いをさけて身をひくJの態度が、グループ内に安定した位置をもつことを妨げていると考えられることはできよう。

さてさきにM反応が平均より高いことが、主要メンバーの特徴のひとつであることをみたにもかゝらず、M反応のとくに高い4人が、いずれもグループAにとつて重要でないことは、注目すべきであろう。このことはグループへの参加を必要とし、かつ参加を認められるメンバーには、ある適当な範囲のM反応量があることを示唆するものではないだろうか。

3. I, F, Tの反応傾向

I、Fの2人は、ともに積極的に他を支配しようとするような行動を示さず、また怒つたのをみたことがないといわれるような温厚さと、少々のことには動じないおちつきとは、この両者に共通している。両者の反応様式

には、きわだつた特徴はみられず、むしろその数値間のバランスの点で、他にすぐれている。ことに I の反応傾向は、ロケーションが W にかたむいているほかは、各シンボルの分布は、きわめてバランスのとれた出現を示しており、Klopfers のいう「よく調和のとれたパースナリテイ」を表現しているものと考えてよい。なお I の W% の高さは注意すべきであつて、これは一般に、思弁的でたゞちには行動に出ない性格を示すとされているが、女子のグループでもグループの支柱となつてゐる N が、きわめて高い W% を示しているのである。

つぎに常にその場のリーダーの手下となつて行動する T の反応様式をみる。彼は主要メンバーの共通傾向に属さないが、その特徴は次の点にある。すなわち T の反応総数、M 反応などは、主要メンバー中もつとも低い。ことに注意せねばならないのは、彼は男子 29 人中オリジナル反応が皆無のたゞひとりであつて、その反応のほとんどがポピュラーな反応であることである。このような反応傾向からは、個性的な欲求をもたない、きわめて協調性にとんだパースナリテイを推定することができる。

4. 3 人のリーダー

3 人のリーダーのうち、Y と H はさきの主要メンバーの共通傾向に属し、K はこれとことなる特殊の反応様式を示す。

いま Y と H の反応傾向をみると、この両者には、それぞれ特異なかつた傾向がみいだされる。Y においてその特徴は、まず S 反応のきわめて多い出現にある。このほかには dAH 反応の多さ、W% の低さなどをとりあげることができよう。H の場合、その反応は 4 ケの M 反応を除いて、ことごとくが F 反応であり、86% というきわめて高い F% が示されている。またその反応中オリジナル反応が $\frac{1}{3}$ を占め、そのほとんどが質的にすぐれていること、ポピュラー反応の出現の少ないことなどが注意される。

Y の特徴である W% の低さは、積極的な行動性を示し、S 反応の多さは dAH 反応とともに、彼の批判的攻撃的な性格を示していると考えられる。すでにいつたようにこのような行動傾向は、Y の現在の位置をたもたせている重要な要因である。

H の O+% の高さは、Z スコアの高さを考慮すると、彼の知能の高さに対応していると考えられるが、いつぼうその F% のあまりに高いことは、色彩反応の皆無、ポピュラー反応の少なさとともに、対人関係における情意的な貧困さ、行動や情緒の柔軟性の低さ、社会的順応性の欠如などを示唆するものであろう。H はその学力と知能の優秀さで、重要な役割を果たしているが、親密な友人

として受入れられることの少ないメンバーである。その理由としては、彼の身勝手さがあげられるが、いつぼうで D などにも、彼に似た行動はしばしばみられるのであるが、H には D のもつているような明るい率直さが欠けている。そのような彼の対人交渉は、なにかその相手との間に、情意の疎通を欠かせるのかもしれない。

さいごに、グループ A の中心的存在である K の場合、その反応様式には、通常の数値的な判定の適用出来ない。特殊な反応傾向がみいだされる。この特徴には次の諸点があげられる。

1. 反応の独立性がハッキリしない*。また反応内容に固執傾向が強い。
2. Letter 反応などがいくつか出現する。
3. 色彩反応は少ないが、いずれも血の色としてみられている。
4. dd-Ad.Hd の反応が非常に多い。

これまでのべてきたように、3 人のリーダーの反応様式は、それぞれ特異なアンバランスをともなつてゐる。もちろんこのような反応傾向の解釈は、十分でないが、ことに K の場合、その反応様式がどのようなパースナリテイの反映であるのかは、なお十分に理解できていない。このことは行動観察においても同様であつて、彼の行動にいくつかの特異さをみることはできても、その特徴をひとつのまとまつた印象として、うけとるにはいたつていない。彼のパースナリテイとテスト結果の理解には、なお多くの観察と、テストの経験が必要とすると考えている。

以上でこのクラスの主要なメンバーの位置と、そのパースナリテイについてのべてきた。

この小学校の 5 年は、3 クラスからなつてゐるが、他のクラスでは、いずれもひとりのリーダーを中心としたまとまつたグループがつけられ、そのリーダーは、ともにクラスの成績の最上位を占め、性格的にも温厚な児童であるという。もちろん、これは直接の観察によつていないから、明確にはいえないが、一般にこれらのクラスでは、口組にみられるようなグループ構成の複雑さが少ないと考えられる。このようなグループ構造の相違や、その変化の過程には、メンバーのパースナリテイを通じて、理解をすすめることが必要であつて、この 5 年口組の場合、3 人の勢力家がいずれも特異なテスト結果を示すこと、主要なメンバーの大部分が、M 型の体験型に属することなどは、注意すべきである。しかし現在のとこ

* 例えば次のような反応の仕方である。(1)「チャョ、チャョ、コーモリ、トリ、トビ……」(2)「クマ、メ、ハナ、クチ、テ、ドータイ」

るわれわれは、集団構造に関する具体的な資料や、ロールシャッハ・テストと社会的行動との関係についての資料を、ほとんどもっていないのであつて、十分な論議は、なお今後の研究にまたねばならない。

要 約

京都市内の小学校5年の1クラスをとり、男子29名について、その集団の構造を行動観察によつて調査し、同時にメンバーのパーソナリティーを、ロールシャッハ・テストで調べた。

1. クラス内の主要なメンバー中、7人は中心的なグループ（グループA）をつくり、他のグループの上位の位置を占めている。
2. グループAのメンバー中、K, Y, Hの3人はリーダー格の存在である。この3者間の関係は緊張している。
3. グループAのもつとも基本的な結合は、K, I, Tの3人に結ばれている。Iの存在はグループ形成の心理的な結合点となり、Tはグループの行動を円滑化する。
4. D, FはグループAの周辺的存在である。
5. グループA外の3人のうち、Jは比較的このグループに関心が強く、S, Wはそれほどの関心をもたない。

6. 10人の主要メンバー中、K, Tを除く8人は、テスト結果に他のメンバーとことなる共通傾向を示した。これは、体験型 *M* 型、*M* 反応及び *O*+% 平均以上を特徴とする。

7. グループA外の3人とDとは、 $M \geq 8$ の反応傾向をもち、またそのグループAへの関心の程度に応じて、色彩反応の価の高いことがみいだされた。

8. I, Fの2人、ことにIの反応傾向は、きわめてバランスのとれた数値分布を示した。

9. Tの反応内容は、ことごとく平凡な反応に終始した。

10. リーダー格の3人の反応様式は、それぞれ特異なアンバランスをともなっている。Yにおいては *S* と *dAP* の、Hにおいては *F* % と *O*+% のきわめて高い出現がみられ、Kの反応様式は、一般のものとことなつた特殊な傾向を示した。

文 献

- 1) Beck, S. J. : Rorschach's Test. I. 1950.
- 2) Homans, G. C. : The Human Group. 1950.
- 3) Klopfer, B. & Kelley, D. : The Rorschach Technique. 1946.
- 4) 教育心理学講座3：学級社会の心理、昭28.

— 1956.3.15. 受稿 —